

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

モンゴル語の他動詞派生接辞 -GA が他動詞につく場合
Attachment of the Mongolian Causative/Transitivizing Suffix -GA
to Transitive Verbs

梅谷博之

UMETANI, Hiroyuki

モンゴル語の他動詞派生接辞 -GA が他動詞につく場合

梅谷 博之

h_umeta2@L.u-tokyo.ac.jp

キーワード：ハルハ方言，非生産的な使役，被使役者

1. 本稿の目的

モンゴル語ハルハ方言の接辞 -ga/-go/-ge/-gö (スラッシュで区切られた4つは母音調和による異形態の関係にある) は, sal-「離れる」→sal-ga-「離す」に見られるように, 多くの場合, 自動詞に付いて他動詞を派生する。以下, 本稿¹では“-ga/-go/-ge/-gö”を“-GA”と表記する。

しかし, ごく少数ではあるが他動詞に -GA が付加されることもある(他動詞に -GA が付加されることで形成される動詞を「他動詞由来の GA 動詞」と呼ぶことにする)。他動詞由来の GA 動詞の存在自体は先行研究 (Bjambasan 1970: 242, 245; Kuz'menkov 1984: 37) でも指摘されているが, -GA を付加しうる他動詞がどのような特徴を有するのか, また, その結果形成される他動詞由来の GA 動詞がどのような文で用いられるかについては記述が見あたらない。本稿では, -GA を付加しうる他動詞 (および他動詞由来の GA 動詞) の意味的な特徴を指摘し (第3節), 他動詞由来の GA 動詞が現れる文の構造を記述する (第4節)。

2. 文法概略

2.1 モンゴル語ハルハ方言の概略

モンゴル語ハルハ方言はモンゴル国の首都ウランバートルを中心に話されている。基本語順は SOV で膠着型の言語である。母音調和の現象がある。

動詞内の形態素は「語基-ヴォイス接辞-アスペクト接辞-動詞語尾」の順序で現れる。本稿で扱う -GA は「ヴォイス接辞」の1つとして分類され, しばしば「使役

¹ 本稿での例文表記は, キリル文字による正書法に従い, ローマ字転写したものを用いる: a=a, б=b, в=v [β], г=g, д=d, е=je/jö, ё=jo, ж=ž [dʒ~tʃ], з=z [dz~ts], и=i, й=j, к=k, л=l [ɮ], м=m, н=n, о=o [ɔ], ө=ö [o], п=᠑, р=r, с=s, т=t, у=u [u], ү=ü [u], ф=f, х=x, ц=c [tsʰ], ч=č [tʃʰ], ш=š [ʃ], ь=’, ы=y [i], ь=’, э=e, ю=ju/jü, я=ja。

接辞」と呼ばれる。例 (1) は自動詞語基²duus-「終わる」にヴォイス接辞 -GA, アスペクト接辞 (完成 -čix), 動詞語尾³の一種である形動詞語尾 (過去・完結を表す -san/-son/-sen/-sön) が付いた例である。

- (1) Či aži-aa duus-ga-čix-san uu?
 2SG.NOM 仕事-REFL 終わる-GA-COMPL-VN.PST Q
 「君、仕事を終わらせてしまった？」

2.2 他動詞と直接目的語

モンゴル語の動詞は自動詞と他動詞の 2 つに分類される。本稿では先行研究 (Luvsanvandan 1968: 30, Bjambasan 1970: 232 など) に従って次の基準で両者を区別する: 自動詞とは直接目的語をとることができない動詞を指す。他動詞とは直接目的語をとりうる動詞を指す。モンゴル語において動詞の自他は動詞ごとに決まっており、自動詞としても他動詞としても用いられる動詞は, excl-「始まる/始める」などごく少数しかない。

直接目的語は主に次のいずれかの形をとる: 「主格」(名詞語幹+ゼロ接辞), 「名詞語幹+対格接辞」, 「名詞語幹+再帰所属接辞」。直接目的語の指示対象が主語の指示対象に属する・関係するものである場合には, 「名詞語幹+再帰所属接辞」の形で現れる。例 (1) の aži-aa 「(自分の) 仕事を」(仕事-REFL) を参照。直接目的語の指示対象が主語の指示対象に属する・関係するものではなく, かつ, 定である場合には「名詞語幹+対格接辞」で現れる。例 (3) の ter zurg-ijg 「その写真を」(その 写真-ACC) を参照。そして, 不定なものを表す名詞, あるいは, 非指示的 (non-referential) な名詞が直接目的語になる場合には主格で現れる傾向がある (例 (9) の malgaj 「帽子」)。

2.3 -GA の概略

先行研究ではモンゴル語の「使役接辞」として, -GA, -AA (母音調和による異形態

² ヴォイス接辞の前の「語基」は, 語根単独の場合もあれば, 語根に派生接辞が付いたものである場合もある。ここでは, ヴォイス接辞より前の語基の内部構造は問題にしない。

³ 「動詞語尾」には終止語尾, 副動詞語尾, 形動詞語尾の 3 種類がある。それぞれの語尾により形成された語形が有する機能は下の表を参照。「形動詞」の「主節述語 (文終止)」欄と「連用修飾」欄の記号「(+)」は, 一部の形動詞語尾によって形成された語形のみが当該の機能を有することを示す。

動詞語尾 (動詞の屈折接尾辞)

機能	主節述語 (文終止)	連用修飾	名詞節形成	連体修飾
語尾				
終止	+			
副動詞		+		
形動詞	(+)	(+)	+	+

は -aa/-oo/-ee/-öö), -UUL (-uul/-üül/-lg⁴) の3つが挙げられている。これらのうち -GA と -AA は非生産的で、かつ、主に自動詞に付く。英辞典である Bawden (1997) をもとにして -GA, -AA をとる自動詞のリストを作成した梅谷 (2015) では、-GA をとる自動詞として 115 個を、-AA をとる自動詞として 131 個を挙げている⁵。それに対して -UUL は生産的で、かつ、自動詞にも他動詞にも付加される。

2.4 他動詞由来の UUL 動詞が現れる使役文の構造

すぐ上で述べたように、他動詞に付加される「使役接辞」はほとんどの場合 -UUL である。以下、他動詞に -UUL が付いて派生された動詞（「他動詞由来の UUL 動詞」）を述語とする使役文⁶の構造を説明する。

他動詞由来の UUL 動詞による使役文は、(2) に挙げる (i) と (ii) の2種類の構造をとりうる⁷。(i) と (ii) では被使役者を表す名詞句の形が異なる。

(2) 他動詞由来の UUL 動詞による使役文の構造

- (i) 主語 (使役者) + 与位格名詞句 (被使役者) + 直接目的語 + UUL 動詞
- (ii) 主語 (使役者) + 造格名詞句 (被使役者) + 直接目的語 + UUL 動詞

(i) と (ii) の具体例はそれぞれ次の (3a) と (4a) を参照。(3b) と (4b) は、(3a) と (4a) 中の UUL 動詞の派生元動詞が用いられている例である。

- (3) a. Bi **Bat-a-d** ter zurg-ijg **üz-üül-sen.**
 1SG.NOM PSN-EP-DAT その 絵/写真-ACC 見る-CAUS-VN.PST
 「私はバトにその写真を見せた」
- b. Bat ter zurg-ijg **üz-sen.**
 PSN.NOM その 絵/写真-ACC 見る-VN.PST
 「バトはその写真を見た」

- (4) a. Či **xen-eer** cag-aa **zas-uul-san** be?
 2SG.NOM 誰-INS 時計-REFL 直す-CAUS-VN.PST Q
 「君は誰に時計を修理してもらったの？」

⁴ -lg は長母音あるいは二重母音で終わる語基に付加される際の異形態である。その他の音で終わる語基には -uul/-üül が付される。-uul と -üül の選択は、母音調和の規則により決まる。

⁵ -GA や -AA をとる自動詞のリストは梅谷 (2015: 74-85) の他、Bjambasan (1970: 293-299) も参照。

⁶ 他動詞由来の UUL 動詞は受身も表しうるが、本稿の議論とは直接関係しないので説明を省略する。詳細は梅谷 (2008: 64-95, 100-102) を参照。

⁷ (2) に挙げる 2 つの他に、被使役者を表す名詞句が対格で現れる構造も存在するが、比較的稀な事例であるため (2) には含めていない。

- b. Činij cag-ijg xen zas-san be?
 2SGGEN 時計-ACC 誰.NOM 直す-VN.PST Q
 「君の時計，誰が修理したの？」

例 (3a) のように被使役者を表す名詞句が与位格で現れるのは，文の表す意味が「許可使役」である場合に加え，以下のような意味を表す場合であることを筆者は以前指摘した（梅谷 2008: 53–63）。

- (5) 他動詞由来の UUL 動詞による使役文において，被使役者を表す名詞句が与位格で現れる場合：
- (I) 使役文が「知覚・認識をさせる」ことを表す場合（知覚・認識を表す他動詞から派生した UUL 動詞が述語である場合）
- (II) 使役文が「行為の対象を与える」ことを表す場合（受け取りや保持・所有を表す他動詞から派生した UUL 動詞が述語である場合）
- (III) 使役文が「行為の対象を撰取させる，口に含ませる」ことを表す場合（撰取すること，口に含むことを表す他動詞から派生した UUL 動詞が述語である場合）

一方，使役文の表す意味が，上の (I), (II), (III) 以外の場合（および「許可使役」でもない場合）には，例 (4a) のように被使役者を表す名詞句が造格で現れる。

3. -GA を付加しうる他動詞

他動詞に -GA が付加されることで項の数が 2 項から 3 項に増えて「使役」を表す例として，次の 5 つが見つかった⁸。

- (6) a. sons- 「聞く」 → sons-go- 「聞かせる」
 b. duul- 「聞く」 → duul-ga- 「聞かせる」

⁸ 他動詞に -GA が付いても項の増加が見られない例も少数存在する。例えば，beld- 「～を準備する」→ belt-ge- 「～を準備する」が挙げられる（子音 d で終わる語基に -GA が付加される際には語基末の d が t に交替する）。本稿ではこのような事例は扱わない。なお，beld- と belt-ge- の意味の違いは不明である。

また本稿では扱わないが，他動詞に -AA が付加される例も少数存在する。それらのうち，-AA の付加により項の数が 2 項から 3 項に増える例としては，xürt- 「(賞を) 受け取る」→ xürt-ee- 「贈呈する」のみが見つかった。3 節の結論を先取りして述べると，この xürt-ee- 「贈呈する」も，(7) に挙げる例同様，「行為の対象を与える」ことを表す動詞である。そして 4 節の結論を先取りして述べると，xürt-ee- が現れる文は (2-i) の構造（被使役者（受取人）を表す名詞句が与位格で現れる）をとる。

- c. sur-「学ぶ」 → sur-ga-「(教義, 教訓を) 教える⁹⁾」
 d. öms-「着る」 → öms-gö-「着せる」
 e. nömör-「被る」 → nömör-gö-「被せる」

次の (7) に挙げる 2 つの他動詞も, -GA が付加されることで項の数が 2 項から 3 項に増えるものである。上の (6) では, 派生元の他動詞と, それに由来する GA 動詞の間に, 比較的単純な「使役化」の関係が観察されたが, (7) では派生元の他動詞とそれに由来する GA 動詞では意味が比較的大きく変化している。

- (7) a. durs-「回想する」 → durs-ga-「(記念として) 渡す, あげる」
 b. ol-「見つける」「入手する」 → ol-go-「与える」

ここで, (6) に挙げた 5 つを, (5) に挙げた「他動詞由来の UUL 動詞による使役文において, 被使役者を表す名詞句が与位格で現れる場合」と比べてみると, (5-I), (5-II), (5-III) のいずれかに該当する, あるいは類似するものであることが分かる。

(6a) sons-go-「聞かせる」と (6b) duul-ga-「聞かせる」は (5-I)「知覚・認識をさせる」ことを表すもの(知覚・認識を表す他動詞から派生したもの)である。(6c) sur-ga-「(教義, 教訓を) 教える」は, 教義, 教訓を自覚させることを表すので, (6a), (6b) と同じように, (5-I)「知覚・認識をさせる」ことを表していると言えそうである。あるいは「(教義, 教訓を) 教える」ことは, 教義, 教訓を相手に教示し, 知識として「摂取」させることであると解釈すれば, 広い意味では (5-II), (5-III) に該当するかもしれない。

(6d) öms-gö-「着せる」と (6e) nömör-gö-「被せる」は, 行為の対象を身に着けさせることを表しており, (5-I), (5-II), (5-III) には該当しないように見える。しかし, 相手に何かを着せたり被せたりした場合には, 相手はその「何か」を身に着ける形で受け取ることになるので, (5-II)「行為の対象を与える」ことを表すもの(受け取りや保持・所有を表す他動詞から派生したもの)であると言える¹⁰⁾。

次に (7) の 2 例を, (5) の各項目と照らし合わせてみる。(7) の 2 例は, 派生元の他動詞と, それから派生した GA 動詞の間で, 比較的大きな意味のずれが観察される。

⁹⁾ sur-ga- は「(人を) 教化する」という意味も表す。

¹⁰⁾ (6d) öms-「着る」と (6e) nömör-「被る」に, 生産性の高い -UUL を -GA の代わりに付加することも可能である。öms-üül-「着させる」と nömör-üül-「被らせる」が述語となる使役文では, 被使役者(何かを実際に身に着ける人)を表す名詞句は与位格で現れる。

「他動詞由来の UUL 動詞による使役文において被使役者を表す名詞句が与位格で現れる場合」について梅谷 (2008) で考察する際に, öms-「着る」や nömör-「被る」などの「何かを身に着けること」を表す他動詞から派生した UUL 動詞が観察から漏れてしまっており, 観察が不十分であった。そうした UUL 動詞が述語となる際にも, 被使役者を表す名詞句が与位格で現れることに梅谷 (2008) の時点で気がついていれば, 「身に着けさせることを表す場合(身に着けることを表す他動詞から派生した UUL 動詞が述語である場合)」という項目が (5) に加わっていたかもしれない。

そこで、派生元の他動詞と GA 動詞それぞれについて別々に観察することにする。

はじめに派生元の他動詞を観察すると、(7a) *durs-*「回想する」は (5-I) 知覚・認識を表す他動詞に該当する。そして (7b) *ol-*「見つける」「入手する」は、(5-I) 知覚・認識を表す他動詞、および、(5-II) 受け取りや保持・所有を表す他動詞に該当する。

次に、GA 動詞のほうに着目すると、(7a) *durs-ga-*「(記念として) 渡す、あげる」も (7b) *ol-go-*「与える」も、(5-II)「行為の対象を与える」ことを表す。

このように、(7) に挙げた 2 例は派生元の他動詞と、それに由来する GA 動詞の間に比較的大きな意味のずれが観察されるが、派生元の動詞も GA 動詞も (5) に挙げた項目に該当すると言える。

3 節をまとめると、他動詞由来の GA 動詞（あるいはその派生元の他動詞）は、被使役者名詞句が与位格をとる使役文で用いられる UUL 動詞（あるいはその派生元の他動詞）と意味的に類似するものである。

4. 他動詞由来の GA 動詞が現れる文の構造

この節では、(6) と (7) で挙げた他動詞由来の GA 動詞が現れる文の構造を記述する。(6) と (7) で挙げた他動詞由来の GA 動詞が表す意味から予想できるように、これらの動詞が現れる使役文は「主語（使役者）＋与位格名詞句（被使役者）＋直接目的語＋GA 動詞」という構造（すなわち (2-i) に相当する構造）をとる。(6a) *sons-go-*「聞かせる」と (6d) *öms-gö-*「着せる」が現れる文を (8a), (9a) にそれぞれ挙げる。

- (8) a. Bi **Bat-a-d** ter duu-g **sons-go-son.**
 1SG.NOM PSN-EP-DAT その 歌-ACC 聞く-GA-VN.PST
 「私はバトにその歌を聞かせた」
- b. Bat ter duu-g **sons-son.**
 PSN.NOM その 歌-ACC 聞く-VN.PST
 「バトはその歌を聞いた」

- (9) a. Bi **Bat-a-d** malgaj **öms-gö-sön.**
 1SG.NOM PSN-EP-DAT 帽子.NOM 着る-GA-VN.PST
 「私はバトに帽子を被せた」
- b. Bat malgaj öms-sön.
 PSN.NOM 帽子.NOM 着る-VN.PST
 「バトは帽子を被った」

(7) に挙げた 2 つの他動詞由来の GA 動詞（派生元の他動詞と、それに由来する GA 動詞の間に比較的大きな意味のずれが観察されるもの）が現れる文でも、「被使役者」

を表す名詞句が与位格で現れる。

- (10) Bi **Bat-a-d** neg zurag **durs-ga-san.**
 1SG.NOM PSN-EP-DAT 一 絵/写真.NOM 回想する-GA-VN.PST
 「私はバトに一枚の絵をあげた」

このように、他動詞由来の GA 動詞がとる文構造には、被使役者を表す名詞句が与位格で現れるという共通性が見られる。他動詞由来の GA 動詞が現れる文において被使役者を表す名詞句が造格で現れる例は見つかっていない。

5. まとめと今後の課題

(自動詞であれ他動詞であれ) -GA の付加は非生産的である。特に、-GA が他動詞に付加される例は極めて限られている。

他動詞由来の GA 動詞 (のうち -GA の付加により項の増加が認められるもの) を観察した結果、「知覚・認識をさせる」「行為の対象を与える」「行為の対象を身に着けさせる」といった特定の意味を表すことが分かった (3 節)。そして、他動詞由来の GA 動詞が表すこうした意味の反映として、他動詞由来の GA 動詞が現れる文はいずれも「主語 (使役者) + 与位格名詞句 (被使役者) + 直接目的語 + GA 動詞」という構造をとることを示した (4 節)。

このように、他動詞由来の GA 動詞 (および -GA を付加しうる他動詞) には、意味的な偏りが認められる (そしてその結果として、他動詞由来の GA 動詞がとる文構造も 1 種類に限られる)。本稿ではこうした事実を指摘することができたが、なぜそのような偏りが存在するかはまだ考察できていない。通時的な観点からの考察も必要であると思われる。今後の課題としたい。

謝辞

貴重なお時間を割いてデータを提供して下さったコンサルタントの方々、および、コメントを寄せて下さった査読者の方に深くお礼申し上げたい。

庄垣内正弘先生に初めてお会いしたのは、筆者が修士課程の学生であったころ、アルタイ諸語関係の研究会に出席したときであったと記憶している。その後、様々な場でご指導頂いた。特に 2005~2007 年度には日本学術振興会特別研究員 (PD) として庄垣内先生のもとで研究する機会に恵まれた。当時筆者は博士論文を執筆していた。なかなか筆が進まない筆者に、庄垣内先生は研究内容や論文執筆の心構えについてご助言下さり励まして下さった。また、ほんのわずかの時間も惜しまれて文献を開かれるお姿を近くで拝見し、研究に対する先生の情熱に深い感銘を受けた。甚だ拙い論考ではあるが、本稿を庄垣内先生から受けたご恩に対するお礼とさせていただきます。

略号

-	affix boundary 接辞境界	INS	instrumental 造格
1	first person 一人称	NOM	nominative 主格
2	second person 二人称	PSN	personal name 人名
ACC	accusative 对格	PST	past 過去
CAUS	causative 使役	Q	question particle 疑問小辞
COMPL	completive 完成	REFL	reflexive possessive 再帰所属
DAT	dative-locative 与位格	SG	singular 単数
EP	epenthesis 音添加	VN	verbal nominal 形動詞語尾
GEN	genitive 属格		

参照文献

- Bawden, Charles R. (1997) *Mongolian-English dictionary*. London / New York: Kegan Paul International.
- Bjambasan, P. (1970) Orčin cagijn mongol xelnij üjl ügijn xev, bajdal [Voice and aspect of the verb in Modern Mongolian]. *Xel Zoxiol Sudlal* 8: 201–300.
- Kuz'menkov, E. A. (1984) *Glagol v mongol'skom jazyke*. Leningrad: Izdatel'stvo Leningradskogo Universiteta.
- Luvсанvandan, Š. (1968) *Orčin cagijn mongol xelnij bütec: Mongol xelnij üg, nöxcöl xojor n'* [Structure of Modern Mongolian: Words and inflectional suffixes in Mongolian]. Ulaanbaatar: B.N.M.A.U. Šinžlex Uxaany Akadjemi.
- 梅谷博之 (2008) 「モンゴル語の使役接辞 -UUL と受身接辞 -GD の意味と構文」博士論文, 東京大学.
- 梅谷博之 (2015) 「モンゴル語の他動詞派生接辞 -AA と -GA : Grep を利用した形態素分析の試み」『東京大学言語学論集』36: e67–e90.
https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=27451&item_no=1&page_id=28&block_id=31

Attachment of the Mongolian Causative/Transitivizing Suffix *-GA* to Transitive Verbs

Hiroyuki UMETANI
(University of Tokyo)

Keywords: Khalkha Mongolian, nonproductive causative, causee

The Khalkha Mongolian “causative” or “transitivizing” suffix *-GA* (*-ga/-go/-ge/-gö*) is principally attached to intransitive verbs. However, a few instances of its attachment to transitive verbs are attested. This article deals with the latter case and describes some of its fundamental characteristics in the following two respects: (a) the semantic characteristics of verbs derived by attaching *-GA* to transitive verbs (“transitive-oriented GA verbs”), and (b) the structure of sentences in which they appear. As for (a), we first list the transitive-oriented GA verbs and then point out that they express such meanings as (i) to make someone perceive or recognize something, (ii) to make someone wear or put on something, and (iii) to give something to someone. As for (b), we show that, among the two possible forms of the causee noun phrase, namely, dative-locative and instrumental, it appears only in the dative-locative in sentences where transitive-oriented GA verbs appear, as observed in *Bi Bata-d ter duu-g sons-go-son* (1SG.NOM Bat-DAT that song-ACC listen.to-*GA*-PAST) ‘I made Bat listen to that song.’